

# 中帰連とは、 鬼から人間に戻った戦犯たち

NPO法人中帰連平和記念館事務局長・理事 芹沢昇雄

## 1. 「中帰連」とは

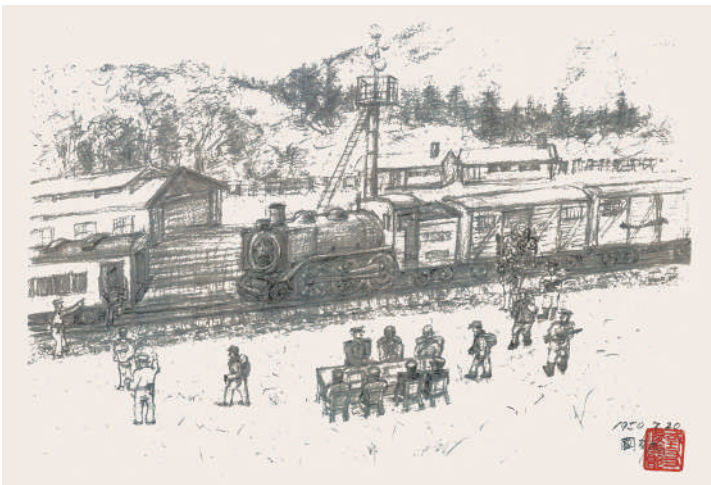
中帰連とは正式には「中国帰還者連絡会」（以下、中帰連）と言います。戦後60万人以上がシベリアに抑留され、約1割の6万人余りが犠牲になったと言われています。

その中から5年後の1950年に969人が旧ソ連から、前年に独立したばかりの中国に「戦犯」として引き渡されました。ソ連側では3段に仕切られた貨車でしたが、中国側では客車が待ち、医師と看護婦が「体調の悪い人はいませんか？」と車内を回り、温か

い食事まで用意されました。戦犯たちの中にはこの格差に「中国によいことをしたから？」と、まだ洗脳が解けない者もいました。

国境の「綏芬河」で中国に引き渡された彼らは「牡丹江、哈爾濱、長春」を経由し3日かけて遼寧省の「撫順戦犯管理所」に収容されました。この移送は民衆からの襲撃を避けるため極秘で行われました。撫順駅から管理所までの数十分の徒歩移動では、八路军は戦犯の隊列に背を向け、銃を外に向けて戦犯を保護しました。

一方で戦後も八路军と戦った元日本



①戦犯は綏芬河でソ連から中国へ移管（中帰連・国友俊太郎 画）



兵140人が逮捕され山西省の「太原戦犯管理所」に収容されました。彼らはこの2カ所に収容され、1956年の「特別軍事法廷」で赦され、3回に分けて帰国し、翌1957年に立ち上げたのが「中帰連」です。

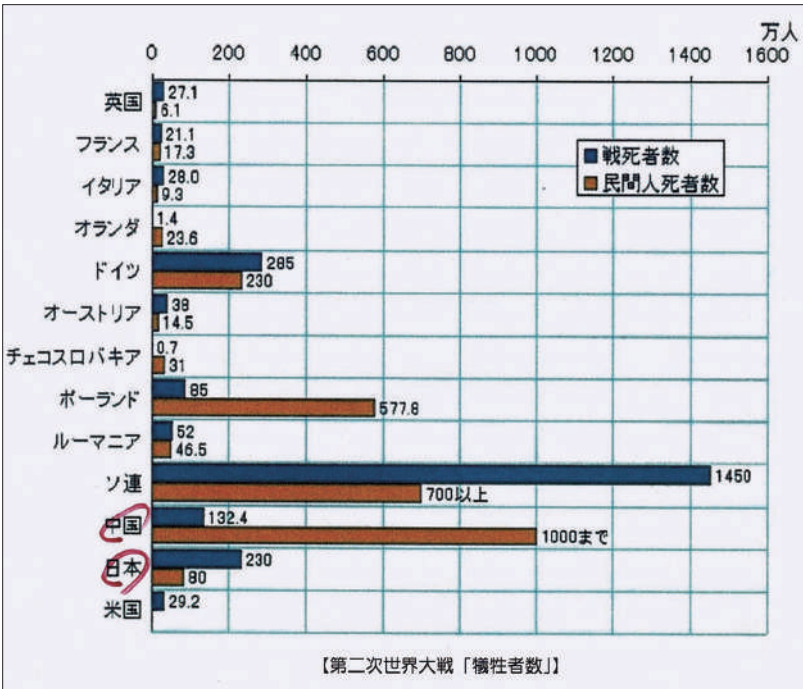
## 2. 日本は戦争の被害国か

日本では特に8月になると「原爆、

者は約310万人と言われますが、中国では少なくとも市民1000万人以上が日本軍に殺害されました。それはヨーロッパのユダヤ人犠牲者600万人の比ではありません。さらにアジアでは2000万人余りもが犠牲を強いられたのです。その皆さんには何の責任もなく、その戦争を誰が始めどう責任を取ったのでしょうか。

沖繩、東京大空襲、開拓団……」など戦争の被害・悲劇を訴えますが、日本は戦争の被害国でしょうか。日本の戦争は鎌倉時代の「元寇」以外、「日清、日露、日中、太平洋戦争」と全て自ら始めた侵略戦争でした。しかも、その日中戦争は、張作霖の爆殺も満鉄爆破も関東軍の「自作自演」で始め、太平洋戦争も敵基地攻撃で始めたのです。

あの戦争で日本人犠牲



②「戦死者統計」(『東京新聞』2006年8月15日)

米軍の沖繩本島上陸の1か月半も前の45年2月14日、昭和天皇は近衛文麿の元総理から「勝利ノ見込ナキ戦争ヲ之以上継続スルコトハ全ク共産党ノ手ニ乗ルモノト云フベク、従ツテ国体護持ノ立場ヨリスレバ、一日モ速ニ戦争終結ノ方途ヲ講ズベキモノナリト確信ス」(『昭和天皇実録』第33、31頁)と「敗戦上奏」を受けました。しかし、天皇は「もう一度戦果を挙げてからでないとなかなか話は難しいと思う」と却下したのです。

その後、東京大空襲、沖繩、広島、長崎、開拓団などで50万人以上の市民が犠牲になりました。近衛は敗戦後の12月16日に自死しましたが、天皇は戦後一言の謝罪もせず「人間宣言」を発し、メディアは「一億総懺悔」(天皇陛下負けてごめんなさい)と国民に責任転嫁したのです。

8月8日のソ連参戦でも関東軍は国民を守るどころか、731部隊や満鉄関係者などと特別列車まで組み真っ先に逃亡したのです。そして追っ手を遮るために橋まで爆破し、逃避行の開拓

団はどれほど犠牲を強いられたことでしょうか。

### 3. 関東軍は中国で何をしたのか

関東軍の「奪い尽くし、焼き尽くし、殺し尽くし」を、中国では「三光作戦」と呼びました。生体解剖、

生体実験は「731部隊だけではない」と、太原の潞安陸軍病院の軍医だった湯淺謙さんは、自ら実行したと証言し本も出しています。

生き埋めや水責めの拷問、強姦、百人斬り競争……など、当時、中国人や朝鮮人は人間ではなく、何をして許されました。軍は補給が間に合わず、「現地調達」と称し食料など現地住民から略奪し、家具はたき火の材料にしました。

強姦に抵抗する女性を「生意気」だ



③「百人斬り競争」(『東京日日新聞』1937年12月13日)



④平頂山惨案記念館 (展示品)

と、井戸に投げ込み、その女性の子どもが母を追って自ら井戸に飛び込むと、その後には手榴弾を投げ込んだとの証言もあります。初年兵教育の仕上げには度胸をつけさせるために、中国人を銃剣で刺し殺す「実的刺突」を強制しました。また行軍の先頭に中国人を歩かせ「人間地雷探知機」に使うことなどもしました。

中国から接収した撫順炭坑が抗日ゲリラに襲われたときは、住民は知っているながら教えませんでした。軍は「写

真を撮る」と言って平頂山部落の住民を集めました。しかし、三脚の黒い布を取るとそれはカメラではなく、機関銃で、それが一斉に火を吹きました。

3000人余りを殺害し、崖を爆破して遺体を埋めました。戦後、中国政府がその遺体の一部を掘り起こし「平頂山惨案記念館」として保存しています。この現場では731と違い数名の生存者から証言を聞くことができました。

哈爾濱の「731部隊」では中国人を「マルタ」(丸太)と称し1本、2本

と数え、生体解剖、生体実験、凍傷実験、細菌兵器開発……などで、3000人余りを虐殺しました。その731部隊は8月8日のソ連参戦で、一人の生存者も証言者も残さず、マルタを全員殺害し、特別列車で逃げ出したのです。石井四郎部隊長はその資料と引き換えに米から免責されました。

#### 4. 管理所での生活

撫順戦犯管理所は日本が中国人收容のために建てた監獄でしたが、中国は日本人戦犯を收容するというので、莫大な費用をかけて暖房設備や風呂、食堂などを整備して戦犯を受け入れました。

当初、戦犯らは20名ほどが入る部屋に、鍵を掛けられ收容されました。彼らは最初に部屋の壁に貼ってあった「戦犯遵守規定」に目がとまり、俺たちは戦犯ではなく捕虜だと抗議しました。59師団長の藤田茂（中将）も自分のことを棚に上げ、管理所長に「君たちは国際法違反だ」と抗議していま

したが、内心では処刑を恐れていました。

管理所では何の強制労働も学習もなく自由に過ごし、職員が一日2食のコウリヤン飯しか食べられない状況で、彼らは白米と中国人数人分の十分な食事を与えられました。職員たちの中には家族を殺害され、たった一人になったものもいました。職員は悔しくて米をとがずに炊いたり、野菜を洗わないで調理したり、食缶を足蹴にしたりし

ました。

管理所は周恩来の直轄管理で、それを知った周恩来は「復讐や制裁で憎みの連鎖は切れない。罵倒も殴打も許さない。日本人の習慣と人道を守れ」と職員に厳命しました。戦犯たちは白米などが出たことで「これが最後の晩餐か?」と思い、また焼却炉の煙突が建つと「あそこで焼かれるのか?」と疑心暗鬼で自殺者も出ています。

しかし、彼らはまだ反省ができず、余ったご飯で白い碁石を、土と混ぜて黒い碁石を造ったりして遊び呆けていました。それでも職員から叱責されることはなく「よく考えてください」と言われるだけでした。管理所はあくまで自身で気付き反省するまで待ったのです。旧ソ連では強制労働、学習がありました。人間は強制では変わら

ず、そう簡単には変わりません。その人道的待遇が変わることなく続くことで、「処刑されないかもしれない?」と少し心に余裕が出てくると、「過去を振り返り反省・認罪するようになっていきました。しかし、その認罪



⑤当初收容された部屋（『人道と寛恕』北京・外文出版社、1957年）

のタイミングや深さはそれぞれで、位の高い人ほど罪を認めるのは遅くなりました。上官は命令するだけです、兵士は自分で殺害しているからです。

## 5. 反省が進む戦犯たち

何の強制もされず自由にできている自分たちが「中国で何をしたのか?」、それでも赦してもらえないことで、徐々に自らの「加害・虐殺体験」などを認罪するようになっていきました。反省が進むと部屋の鍵が外され、所内で自由に交流できるようになりました。

義足や眼鏡を造ったり、予防注射や健康診断を受けたり、風呂も定期的に入り健康管理も適切に行われました。図書室もあり、ときには映画会も開かれ、職員との運動会やバスケットボールなどの記録映像もあります。身体がなまると自ら労働を希望し、瓦生産も始めましたが、これは希望者だけでした。



⑥「李徳全女史来日」(『読売新聞』1979年10月31日)

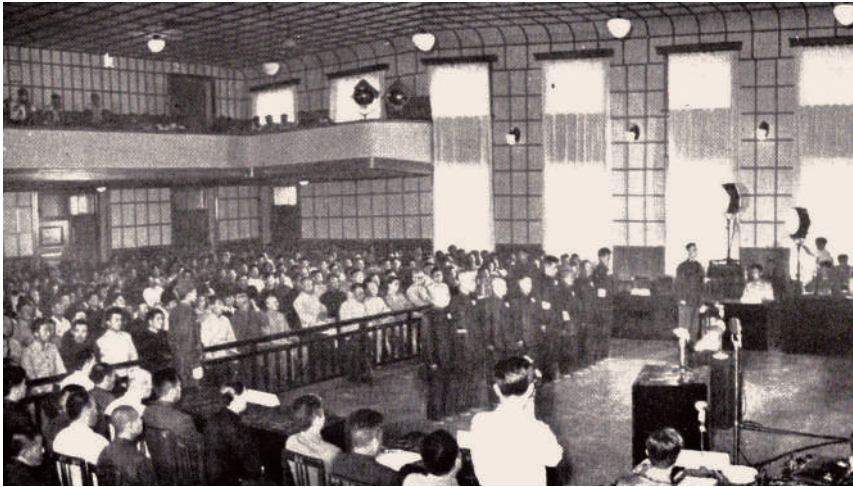
図書の差し入れもあり、希望者だけの「勉強会」も始まり、東大で哲学を学んだ戦犯が講師になり『資本論』なども読み、徐々に自身で過去を振り返っていきました。その場で、もの凄いい議論になり、「あなたの指示があったから私はやった!」と部下に言われ、「あ、そうか」と気付く上官もい

ました。3年目頃までにほとんどの人が自身の加害・虐殺体験を手記に書きました。

国交回復前の1954年には日赤が中国の「紅十字会」の李徳全女史を招聘し、初めて「戦犯名簿」が開示されました。戦後、既に管理所に4年、シベリアに5年、召集から数えると15年近く行方不明だった夫や息子の生存が確認され、家族はどんなに嬉しかったことでしょうか。しかし、既に戸籍を抹消されたり、妻が弟と再婚していたりなどの状況もありました。その後、面会が許されるようになり、日本から面会に行った夫婦の寝室には枕が二つ並べてありました。

## 6. 特別軍事法廷

1956年に瀋陽と太原の両方で「特別軍事法廷」が開かれ、被害者が自分の傷を見せて証言したりしました。家族全員を虐殺された女性の証言や、溥儀の証言映像や、法廷で戦犯が土下座して被害者に謝罪している映像もあります。



⑦特別軍事法廷（前掲『人道と寛恕』）

1062人の戦犯のうち起訴されたのは僅か45人で、死刑も無期もなく、しかも刑期には管理所での6年、シベリアでの5年の計11年が算入され、満期前に帰国を許されました。他全員は「起訴免除」として釈放されたのです。満州国國務院総務庁官だった武部六蔵は病室で禁固20年を言い渡されまし



⑧管理所中庭でのパーティー（前掲『人道と寛恕』）

たが、「病気のため釈放するので帰国してよい」と言われ、号泣している写真もあります。彼こそ生きて帰れるとは思っていなかったでしょう。起訴免除の戦犯たちが管理所に戻ると、中庭のテーブルにビールとつまみが置いてあり「パーティー」の用意がしてありました。そして、職員が戦犯たちの手を握り肩を組み「よかったですね！」と自分のことのように喜んで

くれたのです。「中帰連の証言は嘘だ」と右翼は言いますが、当時NHKが取材している写真もあります。当初、敵対関係にあった戦犯と職員はここまで理解し合えるようになりました。それは中国が赦してくれたことで、戦犯たちが認罪・謝罪し、戦犯たちが反省・謝罪したことで職員も赦してくれたのです。つまり赦しの理解の輪が広がったのです。

## 7. 帰国

戦犯たちは56年の夏に3回に分けて天津の塘沽港から興安丸に乗り、舞鶴を目指しました。帰国に際しては「新しい服、新しい靴、新しい毛布」に現金50元まで支給され、その50元でお土産を買って帰国しました。港では職員の方々が手を振って見送ってくれました。

この規模で被害者が加害者を赦した歴史はなく、甚大な被害を受けながら、中国が「賠償請求権」を放棄しただけでも凄い

ことです。日本は侵略戦争の日清、日露戦争で賠償を取っているのです。私たちはこの事実を後世に伝え「信頼関係」を築いて平和を維持したいと考えています。

## 8. 帰国後

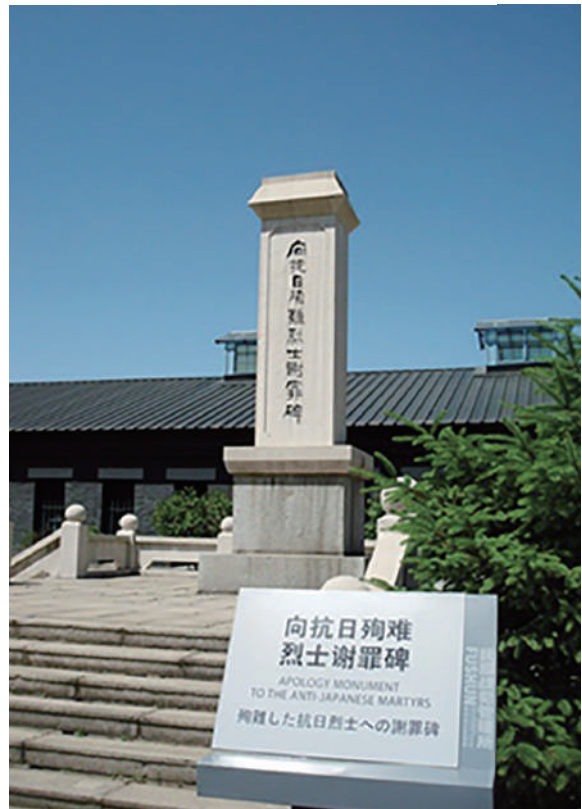
彼らは1956年6、7、8月と3回に分けて帰国しました。しかし、帰国すると「赤、大陸帰り、洗脳者」とレッテルを貼られ、公安警察が就職先にまで押しかけ、そのため「明日から来ないでくれ」などと言われ、多くの皆さんは就職が大変困難でした。



⑨天津・塘沽港の別れ（前掲『人道と寛恕』）

中帰連はその就職情報交流のために、帰国翌年の57年に立ち上げたものです。その後、生活が安定してくることで自身の加害・虐殺体験を証言するようになりました。

2000年に慰安婦問題を裁いた「女性国際戦犯法廷」で加害証言したの中帰連の金子安次さんと鈴木良雄さんでした。しかし、その加害証言部分分をNHKがカットして放送し大きな問題になりました。放送前に金子さん宅にNHKから女性の声で「放送で実名報道していいですか」と確認電話があり、金子さんは「いいですよ、私は



⑩管理所内に建てられた謝罪碑（筆者撮影）

証言者ですから」と答えていました。

## 9. 「中帰連」解散後

中帰連は高齢のため2002年4月に解散しました。解散式には全国から中帰連の皆さんが集まり、懐かしく再会しました。しかし、その直前に中帰連最後の会長・富永正三さん、最後の撫順管理所長・金源さんが亡くなり、解散式はお二人を「偲ぶ会」ともなりました。

その翌日、私たちは彼らの思いを受け継ぐと「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」を立ち上げ、北海道から九州まで



⑪中帰連解散式（筆者撮影）



⑫「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」結成式（筆者撮影）

10支部を設立し、当時まだお元気だった中帰連の皆さんに「証言集会」をお願いしていました。

しかし、ご本人が亡くなるとその証言活動ができなくなり、またご遺族が彼らの資料を処分する傾向が見られました。私たちは戦争体験者ではなく、その資料を使って後世に伝えるしか方法がありません。

## 10. 中帰連平和記念館

私たちは彼らの資料の散逸を防ぎ収

集するため2006年11月に川越市笠幡に「中帰連平和記念館」をNPOとして立ち上げました。

目的は中帰連の戦争体験や、鬼から人間に戻った経緯などを多くの皆さんに知ってもらうことと、ジャーナリストや研究者などに必要な資料を提供することです。記念館が開館したことを知った研究者の皆さんが協力くださり、中帰連以外の戦争関連の資料や本を寄贈していただき現状になりました。今まで市民や市民活動団体、内外の研

究者やNHK、中国中央電子台（テレビ）などの取材にも協力しています。

この場所は初代理事長の仁木ふみ子（元日本教職員組合本部婦人部長）が近くに住んでいて、この中古のプレハブ小屋が空いていたのです。札幌在住だった中帰連の大河原孝一副会長が中心になり、ご健在の全国の中帰連の方々に「カンパ」を呼び掛け購入してくれました。ゆえに家賃もかかりませんでした。この場所がなかったらこの運動はできませんでした。ここには中帰連の皆様のおいが詰まっています。

なお、初代の仁木理事長の「戦争と教育は一体」との思いから、「家永教科書訴訟」をともに闘った教育学者の山住正己先生（元東京都立大学学長）の蔵書をご寄贈いただき、「山住文庫」として保存しております。

記念館は2026年11月8日に「20周年集会」を開きますが、この2年間、一切の公的資金は受けず、全て全国のご理解、ご支援くださる皆さんの「会費・カンパ」に支えられて運営できたことに、心より御礼と感謝申し上げます。



⑬NPO 法人中帰連平和記念館（開設2006年11月筆者撮影）

記念館の開館日は「水、土、日」の週3日で、年4回の理事会を開き、会報も年4回発行しています。事務局は事務局長と司書の二人なので、「資料整理ワーキンググループ」を立ち上げています。

中帰連関連を含め100本以上の戦争関連の映像もあり、偶数月の第3土曜日の午後「ビデオ上映会」を開催したり、研究者を含めた「供述書を読む会」なども開催しております。また3年に1回世界各地で開催される「国際平和博物館会議」や、毎年全国交流会が開かれる「平和のための博物館市民ネットワーク」や「戦争遺跡保存全国ネットワーク」などにも参加しております。

## 11. 周恩来の言葉

「日清戦争以来、日本は我が国を侵略し、人民を傷付け苦しめてきました。我々は深い怨みがあります。しかし、中国と日本との間には2千年に

わたる友好の歴史があります。戦争による不幸な歴史はわずか数十年にすぎません。我々は日本に怨みを持っていませんが、忘れようと努力しています。これからは日中が力を合わせてアジアをよくしていこうではありませんか」（2007年3月19日 NHK「ラストメッセージ 第5集 命をかけた日中友好 岡崎嘉平太」より）  
（2025年12月11日・公開講演会）

## 筆者略歴（せりざわ・のぶお）

1941年東京神田に生まれ、1945年3月「東京大空襲」に遭う。1946年に父が病死、一人っ子の母子家庭となる。高校卒業後、東武鉄道で42年間電車の検査部門で働き、労働組合運動に参加する。2001年定年。

「神戸少年事件」の処分取消しを求め最高裁まで闘う。2006年「NPO 法人中帰連平和記念館」(<https://npo-chuukiren.jindofree.com/>)を設立、事務局長・理事。

げる次第です。

なお、初代仁木ふみ子理事長の後任の2代目は731研究者で慶應義塾大学名誉教授の松村高夫、現在3代目理事長は治安維持法研究の第一人者の小樽商科大学名誉教授の荻野富士夫です。